

「からし種ほどの信仰」(要旨)
聖書箇所：マタイの福音書17章14~21節

【1】 ああ、不信仰な曲がった時代だ

群衆の中の一人が、息子の癒しを求めてイエスに懇願しました。イエスが山に上っている間、他の弟子たちに依頼したけれども治すことができなかつたためでした。マルコの福音書は、この息子を巡って、弟子たちと律法学者が論じ合い、それを群衆が困っていた様子を記しています(マルコ9:14)。

イエスはそうした群衆、律法学者、弟子たち、そして息子の父親を見て、「ああ、不信仰な曲がった時代だ…」(マタイ 17:16)と嘆かれたのです。息子の癒しを求めた父親ですら、イエスに完全な信頼を置いていませんでした(参照マルコ9:22b)。

【2】 からし種ほどの信仰

イエスはその息子を癒されました。弟子たちは、自分たちが癒せなかつた理由を知りたいと思いました。彼らはイエスから「汚れた霊どもを制する権威」を授かった者として、その少年と向き合ったことでしょう(マタイ 10:1,8)。ところが癒せなかつたのです。それで、そつとイエスに尋ねたのでした(マタイ 17:19)。

イエスはその原因を次のように指摘されました。「あなたがたの信仰が薄いからです。…もし、からし種ほどの信仰があるなら…」(同 17:20)

「からし種」と言えば小さな種の代表格です。ですから「からし種ほどの信仰」とは、「小さな信仰」と言い換えることができますでしょう。弟子たちの中には、そのような小さな信仰でさえなかつたというのです。では、イエスの言う「信仰」とは何を意味するのでしょうか。

【3】 信仰は山を動かす

私たちは何に信頼を置いて生きていますか？これまでの経験、常識、さまざまな格言等々。学生時代こんな言葉を聴きました。

「石を信じれば、石に左右される生き方になる。」私たちは、何を信じるかで、全く別の生き方を送ることになるのです。イエスの言う「信仰」とは、神に信頼を置くことです。神のことばに信頼する生き方とも言えるでしょう。信仰とは、神の約束を信じ切ることです(マルコ9:23)。

「イエスは彼らをじつと見つめて言われた。『それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。』」(マタイ 19:26)

「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるといふこと、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」(Iヨハネ5:14)

天地創造の神ご自身が、本当に必要なことであれば、山をも動かしてくださるといふ信頼です。

▶「山を移す」とは:ユダヤ人は聖書の解明、解釈ができ、難問題を解決するすぐれた教師のことを、山を移す人、山を砕く人と呼んだ。…困難な問題を解決するという意味で、人がよく使っていた(W.バーク)。

信仰と祈りは切り離すことができません(マルコ9:29)。私たちは祈ることを軽視する時に、今日の聖書箇所が登場する人々のように互いに論じ合うことに終始します。私たちが神に目を向け、神の全能の力を信じて祈る時、神が用意しておられる希望のご計画に注目するようになります。「わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——主のことば——。それはわがわがではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(エレヤ29:11)

▷「からし種ほどの信仰」であっても、「信じます。不信仰な私をお助けください。」と祈ろうではありませんか。

